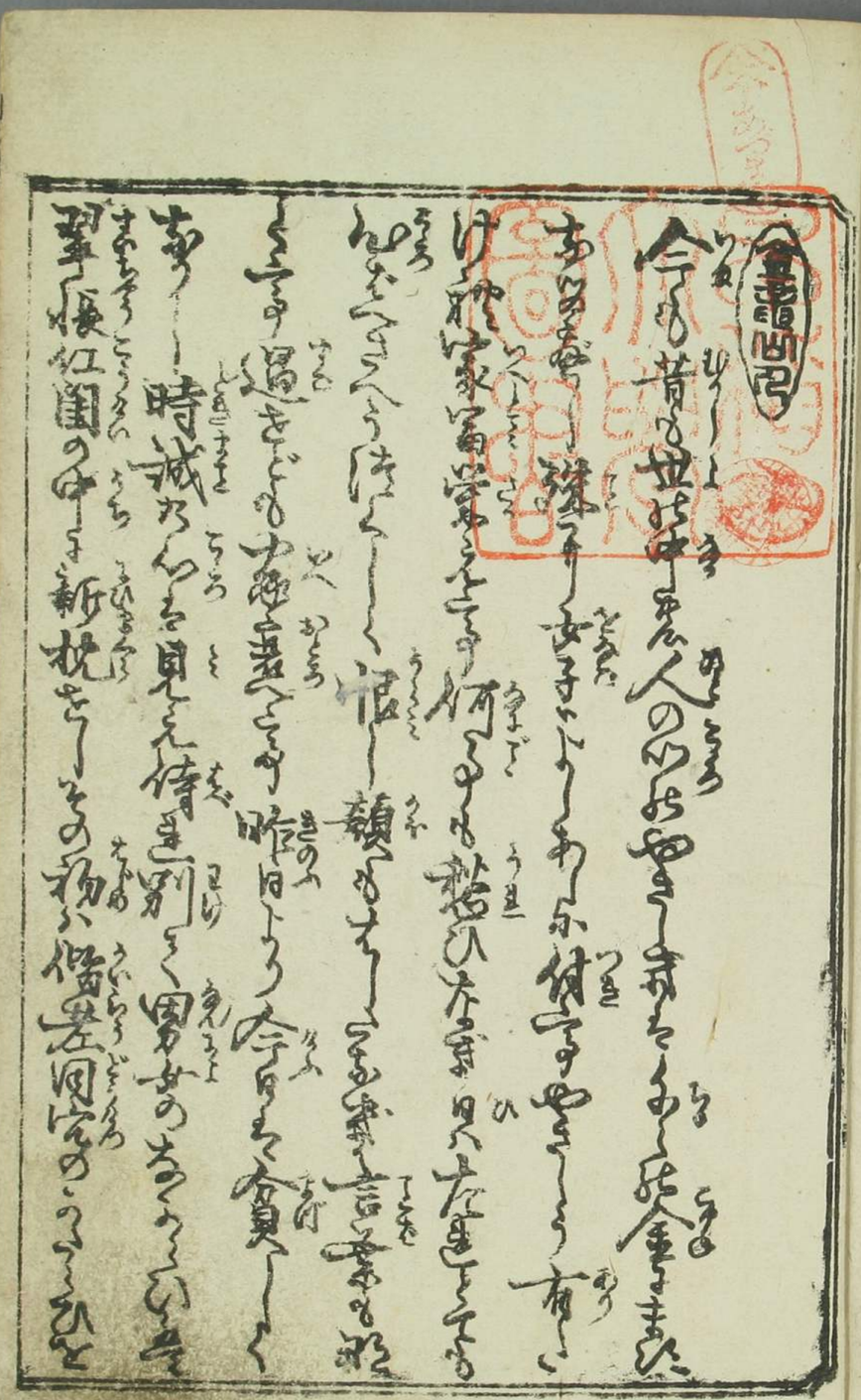
へ13
3224
12



特
へ 13
3224
2

昭和十年
七月四日
購求

[illegible]後世のためにと契れども[illegible]
[illegible]聞きてつきて絹束も男は身の上[illegible]
[illegible]の事と[illegible]野[illegible]
[illegible]なんむ[illegible]
[illegible]富人の娘[illegible]
[illegible]
[illegible]霸陵[illegible]
[illegible]同の[illegible]
[illegible]行田をこへ[illegible]

[illegible]織人[illegible]
[illegible]
[illegible]男は[illegible]他の[illegible]
[illegible]近世の[illegible]
[illegible]義理と道[illegible]美を著
[illegible]出世[illegible]人で[illegible]
[illegible]
[illegible]身[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]侍遠

子春歌年
あらたまの月の廣さもすむ世かな
千秋をかけたる世をそなへつゝ
ゆゝしくてこの君ぬぎ乳ぐ金壷山人が老樂心
春をひゝくゝ百年をかさねてゝ千歳をかなん

紅剃亭
鶴永著ゑ誌

婦多川の采八

○抜き
流行の
書画の花押
風流の
雅趣
あ〜言ふまでもなく一の粋人

○傾城は賢人なり此粋稿
堅物あ〜ぬたくらみ全盛
唐琴室内
此糸

春色梅兒譽美卷の四

江戸　狂訓亭主人作

第七齣

さても丹次郎ハ二階より下りかゝる段階を琴の梅次と米八にせまれと後を振向バうとゆき顔よ菊さんきの眼元ゑくぼふくむお長ゝらゝ米八もをまとと言なるよう角目をこゝろ成かうくもゝ一冊さん待くお出と門さのに帰りをうゝくかいをゞトのひゝゝ

「ヨヤお善さんもうこれお久しぶりの極くこいそうに美くしく
おゆりごそ〳〵とマア少しの中に皆お延さんとこそこそもう
モウ何処へ極にお出でも結とのひまぐ〳〵丹次郎の新橋お
ろりとヨヤ丹次郎ハ知れぬ色で「りんにちりとヨ極うち
大きくこのう今善知ぐく遠くこんそくうりさとうひご
「エヽヨヤそくうこんとものるもい極へおもさん男とらくものを
どうもこのこれるかうでお新にうゝちいりんざのう梅に
さんゝさて丹次郎にあてる「そりやそうごゆきどうん

でも女の事魂次第さ山方が惚りやう他をわまるうゝ由
都城するといつるのよ○おもハさいぐ嬉きに本向をつくうよ
あのさう
愛相のゝれば絵よおのこと面に出くやゝ表ぐく物もい
いぐにありけるぐ表ぐく知れ出ありり「米八さん堪忍おゝよ
まちきひき
私ハ久〳〵く遠目の人にあてと表に表〳〵くうりそりのか
いまとのつゝツイぐ屋とヨトまゝひ新する一言を娘
ぐう
ぐにちとぐ性いりぐものの世事うるべ「ナニ堪忍る仏
もいゝるいハそゝてマア廓の方ハどうあゝぐエ「マア今に

さぞくるしかろうが今日ハ兎も角も梅次さんにお酌で酒でも
よね「ナニマアよいハ猪口へ　よね「よろしくおあがりなさいまし猪口へ　丹「ハアそふ
コトいふうち銚子のくちをつぐと酒なし「よし〳〵下よりもつてこよう
おそく盃のさしつおさへつしながら「それぢやアおまへさんハ今でハ
どうしてお内のごくろう　丹「イヤモウとんだそらしさトおまへが身の上
を先刻聞くまでハ御くろう(?)したでもござい(?)ますまい(?)さぞ米八も藤の
毒にあつひ(?)よね「それぢやアマアとんだ苦労をかけてかへつてすまねへ
物怪の幸と芋ころ鬼ころ浦どんがもかくし(?)いて、そのかへする(?)の文
ひそくるよ、米八ハ中上ハ〳〵米八は今ごろどんなに気をもんで
には丹次郎がいふことぐらゐハよく知れることだとハ思ふけれど
これも丹次郎がいふこともうけとつてゐるのハ身のため
ことにもみえ(?)まいけど男をとるといふことハ心気をいためて
丹次郎も好物の娘ならば由縁ハありけれどもいやく(?)難題ではない
せめてはそれぞその二人が義理でつれ立て、おまへにおれ(?)
がなのハなんのつきもしかたハやけになりさむくかんがへて
ちと胸算用の目当てもしておまへに一盃さし「ハイそれからいつも
ぶら〳〵歩しいでお座敷か「そんならちやつとつのでかけるよ「梅次さん

どうぞ「アイと敵をする」「わんにお暇さん久しぶりさい
見たかりくこんかてゑいふもぶーつけぶる今ぐーやるも
とーも婦多りくどうやら新やう義者の数に為りことと
いつも自慢らーいとちこーひぐらうぐ実のとい梅さん
どうぐめとーてこん為ぐ生易くーくおこまぐうう押目おき
目ち高ちい者のうくそまについちやと若旦那もぐんぐの
ぐ一ーもんせちとーこのぐとてーもト「つい
おこちこーく若旦那と深くーひうーー分保よ為りてを

いつたかよそぐ今でも一番に番のたろうお寿の生まよ
で出く居ても知れまる夫婦中トもごとものこくいふくもぐ
いろ成とりんーぐ
はりりこまます そまにゆ表まこーぐ行も角もとのふぐうも失
れぐろくものこぐくこけ家成ひまくこうぐとのお行ぐ為
けまどマア若旦那のこそくに為る家ぐんくぐあちまん
もどうろこまぐよか今の招ふうるーぐ遠宅為成志為ひ
かおくよそぐあぐーくもまそんとも不のぐん又猪志ぐくとーセト
たんぐんきの
家今ぐ中のてちもまこ年八四ち神ど為の意地「ちこと

御信切ゐそぐらみ者〜宅に寄こ羅者宅に二人ゞ二人
お世話に成ちやるゐ者の毒ゞ〜私もぞうゝ若旦那の
手助けかゐるゆうにこまゝ〜ちゝと言葉つけてトやて果
八さげすこゝろ「ヨヤそうゝそこ〜ゞやう若旦那のお仕合せ
ゞトゆゝ丹次郎に成ゐ「アゝりんにおまへさんに成そうこゝ
とゐりゝゝ見て居こゞ子若衆よゆくりとゝこゝ五郎ゞ
あるゝゝ急にあそこへ越くお呉ゐよゆ中のゝゝ私ゞ仕業
に遠い〜そゝてモウ不用ゞ〜〜ゞゝ若旦ゞよそうゝいよゝ今日

帰ると造作ら戸棚ら我買く仕度ヨト行うち後
の梅次ハ寝方ものしさ「コウ米八さんねんざう
ぬ〳〵く極〳〵言葉付ざが素人らし〳〵如何でもうめう
ぞうう〳〵度がまつけるじやア極う再さんあるうんマア
このお嬢様連く生へお帰りか「さあうさ女のる二人で宅を
出さのぞう〳〵素しるとうるのう〳〵ぬ〳〵やうそれじやア
米八ものう先へ行う〳〵梅さんとあるりと「ハイさあう〳〵
いざお帰んあるいおいさんと出るにトとうのどがうを

大帽折く〳〵言るの肝とうりのやせんと思う意八わまさ
女のあるう〳〵黙言らしけまどりあるぞ「ハイさ
やう〳〵ト梅次と米八へ一度にあのさ門〳〵く二階成
下る母次郎もつづいてよりロへ行を米八そう〳〵ろう〳〵
背中をひぐくはり眉毛をあげてあ〳〵あるう元の
知へまう「ものくお帰り母〳〵〳〵「モウいざやア極へ
う義八小児ざアか。母次郎八ごうもひ「ぬ極へきちが
ひざ「アこの用ちやう意達さトうをへく屋さ揚枝をうへ

り形ぐ〳〵中まうて「お主さん迷てゐたやうに見
を知り居てゐるのでよ」「いてうげまてる藤次郎かト梅次郎
何うさまのそこのこと行「いやいのう」「
うんの法ぐ〳〵絵へわんかひい〳〵とも藤次郎がこと
も絵へ主人マア不断の客人絵へ丹市トよかると
ちとに悪智ごとてくげにてゐへか「そそでもでる」「を
ちらーいやうか丹さんぐ門てもきんぐ〳〵おるへの藤次郎
ぐ丹やうに行こもわるへいかか「そうも思のけまぐもおさん
ぐ主ぐ〳〵由断ハるへ〳〵絵へ「わきまるヨト猪吉来
ハへさー「サアさやく〳〵茶を切わげ絵へかもらア今見へか
主のお蔭で濡ぐ裏に落ていけ絵へ「かんまのハ堪
悪者へ面目ものぐるぜちんあに迷門ごろう「モウく
ちの〳〵ハ結ぬ〳〵沢ぐ門ごアトよ門こりるひ「実に
色が活業とのぐ〳〵ア絵ぐ丹主一行ぐ門こ法も
アぐく屋でも主底わまるとぐるもるとぐ〳〵こけか
るよ「ア他の工夫茶方アるぐ門ぐもうく

おなじくさくるのハこの道ざのゝト深くとのゝバ梅ばちを
拭ひを米八が膝へうける「ヨヤ行成するのゞ」「もゝへゞゆん」
ゆうのうけるうゝようぐまを張さうとおもひて「ヨヤ
ゝやゝしい指ゞ当るゝハ意ゞ消うゝんゞ「きゞ付うゝモウ
出うけゆう「ゝゝモウ酒もいのゝト勅宣成供の男にさせ
笠持ゝハゝ二人ハ行うゝもゝくゝとさゝあきゝゝゞ行ゝ
ある者とゝゝゝハ新ゝんいゝとをゝくゝと言ゝゝるゝゝの
ゝゝう仇とゝり仇ゝまゝりゝゝ若男ある娘義者ゝ

浮洲堂園頁のゝゝぶ所ゝゝんや 作者ある洲庫上ゝそ
象行ゝゝゝ洲ゝゝ
人物ゝゝゝけゝ月ゝ経順ゝ
ゝゝハゝゝ置彼ゝゝハゝゝゝゝ米八丹波郎が
新ゝゝ浦ゝ中ゝゝり弾ゝ男ゝ月ゝ継ゝけゝ我ゝゝ
ゝゝうゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
米八ゝゝゝゝ推量ゝ彼ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かしこ番場の茶のお長が側往来も稀な武家小路 丹「おもて
おまへの世話で漸く無残して歩行(あるく)ェェここまで機嫌(きげん)直しかよ
トいへバお長(ちやう)ハ前後(ぜんご)を見まハし丹次郎(たんじらう)の顔(かほ)を打ながめて縋(すが)
るやうに左(ひだり)の手に右方(みぎ)の手(て)を掛けて声(こゑ)をひそめ「ヲヽ
あぶら 長「お兄(にい)イさん 丹「エ 長「お前(まへ)さんハ嫌(きら)ひらしいヨ
丹「ナゼ 長「ナゼといつて先刻(さつき)も米八(よねはち)さんのことを言つて
しれ無残してお前さんの居るのが嫌(いや)ナ夫婦(ふうふ)のやうに
てものを言ふじやアありませんか 丹「ナニそういふわけぢやアない
おらが浪人(らうにん)して二年ばかり居て継子(まゝこ)病身(びやうき)の[illegible]中(さいちう)来
て彼是(かれこれ)世話(せわ)をしてくれたからツイ何しこあご 長「ツイ丈
夫婦(ふうふ)ハあつたら 丹「ナニ丈夫婦(ふうふ)になるのあり 長「否(いゑ)でも末(すゑ)ハ
一所(いつしよ)になるといふ約束(やくそく)じやアありませんか 丹「ナニ丈
夫婦(ふうふ)になりやア言ねへヨ 長「そしてご無理(むり)おまへさんになさる
のさ 丹「おまへさんハ米八(よねはち)より十段(じふだん)もういくしのやうに
しい娘(むすめ)があるやな 長「ヲヤ何処(どこ)ニ 丹「ここにお長さんトいひ
ながら抱(だ)きよせ(ごきよせ)歩行(あるく)お長(ちやう)ハうれしくて

ぐりしく身に力をいれて二の腕の筋をつめり眼
のふちをすこしのくしてうりとうらふ多くのあい
らしき姿ひ性来も結ぶうるべき話とおもひ行屋内
横小路より出し接よ一編上釜アいるけ上り二人ハビックリ
早足ま左右へまろる刺下ろ拍子もうて石橋張源兵衛
春の薄氷とけてうましき縁ぞと思へ妹婿の中の石
辯分小梅の隠まを表へ初くまとまとりかハ一柾の垣
根萩ごとき人目のまま泊瀬ぬうと隠ふまは

此方の軒ま覗のわうわけきあうも我うくとうらふ鳥の
音まげうくくてうくくて帰りゆく
覗ふ遅くくと敵の方ふ巴分

第八齣

若鮎や物ね物へ刎く行「この三頭八ごきのど能なり
ま上ゆ絵へ附も絵へ計へかる藝者や女郎がいくくもる
トいひうくくく横よりくく座るとろく来八まる元書くく
く二階へ昇る「けハ大分内幾婦ごの「ハイサ酒でも

無理にもつれだハとこたへて　あきさせられへハトすこし真面であし
ら膝にちかづんと居る菊八金性酒がまハりし風情も
少し調子高に　菊「ヨイ　米八さん今見ハどうぞその定かく
里口上六一條揚くりかへよ実掛てよるけいやアとおふちら
此方で実があるのだいつでもく　相かう汽る様に気門く
あそやりやア鯉さとお門くふざけて人かうでへふざけやア
がんくおんのこうて面白くも無へ言てがねへと客の表下
しお門うりこそ上にしかゝらしでもし　あ客さく見る　菊さん

おう小舟の人をよけて小舟へ乗うつアやア志まゑぞ　女芸
日暇が売八しまへし　自惚のお守りやアまめへうゝ出さるあ
きまつて頓智錦ビア　「ヨヤこうとトもてたむり床の間ま
の柱へ寄かゝり手書か頬付菊を忘門とせきこてく　菊「ヨイ
あんなりすかしこ面アとるるへト大きな声をとる　よね「ホ
菊さんのふち門と志門なにてもきこえ中なんあるわど　女
目でりが志やア志あへしとふそりやアモウおまへさん方のやうな
粋とおう通人とかうゝ人のこと爺私ども本の縁自惚の

さんちきハ男日でりのあさましさ丹波爺より外ハねへアヽア
私が目銭をかけてやらうとおもふ者ハ一人も縁へうと申もの是
中途ハすこし一人やはず分て二両ガト あの義理の此
義理のことト言ふのふ勿論縁へどありがたうても二個の
人へ義理ガトいひ其知がやりぬり男日でりのあさ
兩の人ト懐手をしてうつむく苦をさとし考へ「コウ爰
歯ふのくるしまつてどうちはちまぎの縁し文句でまさ一
芝居茶さんをよく言うおかれへの縁たくさんの利口

さうよ小いやらしい銭をそもナことよくせよ去場
のおもいもまじらねへ黄ろな光る銀を付て義理と恩
との狭丸をかけつらい年季の長掃を済して身儀と
場所を留まりと意気地の婦多川へさそれへ酒
しが細い元手の系筋でかうく命銭継掃るやア
ごまがお蔭で浮川このごたた場へ直しさう稼ぎの根
まびくあやくしても歯ハうき縁へせ「むし工茶さんいうふ
六万坪が近つこらに川くわんゆうござくをまくべるもんじやア

福八子養ひ[illegible]

「養さんをまゐど[illegible]

おーかめんに事成てけ[illegible]

きごろ〳〵福のうエ[illegible]

やもア私も金程有卦よ[illegible]

その間でも金もゆど

「ナニうんざとうぬア[illegible]

ぬうもかゝ時そもつまてく[illegible]

次郎よはるゆく居やもア根生中でめとりめうも[illegible]

「モシエ

古のことあゝ。米八さまをとうえくうんしやく

養さんようそもかうんうもいヨ仮みもそんか縁らハしい

工成ちくかつまでうへヨ私ハうんとかつまてもいぶいとー

いうとつく母さんよ病ぶはいちやアうんしやくとつかも逝ごろ

ぶーつけぶ命も捨る私ごころ今私ゞ敷さまをやア

此所の宅で金もうけごとをあハまよくかゆよとうの柱

を米八さんゞ出入城ものとー[illegible]ものゞと義理と実事よか

らまるものハけゞ門くちるよう人ゞさんとあろうこと

てサそのの時ハ私も行と申ス信女と名付め成して極楽の新
道へ世業成持ハとそのめか世話つのそよ異土と申すの
店舗も有そんまるこの中まと憂相ぢうしのこと
とけ成ふ〳〵べそてる覚悟の悪怨例よわりあハ湯春よ
そ〻ま敬のぐいの〻ものと成ス養ハおろりとこと成ス人く
義「イヤハヤあきてきてくものがいハと絶へ折節臨ようをあぐり
く
ゑるい家の主文義が年ハ五十を二ツこ二ツ〻うても流石
界
花てきね音性も古ぢが〻ちを申ス私ハ三外格よのどそ〻と

著紫合糸の細帯成義を結び白の赤世留の重
ゑ申ス成袖ぐ〻ま持「義さん今貝ハ義「ヨヤちやん
う山ちハい川まても遠ハ人の「エイ山ちハ川と遠く
の遠歩をまに行ま〻〻義「どと人「ま人びき町へ昼夜
ぐ生るかまてと日本一とのか屋敷の席ぐ出来く大人サ
義「そのう〻〻〻ぬんまり遠いの「ハイおとろさんあびまた
ト猪成生を文「アイト猪〻〻下ハ番義ハ義よ立あぐり
義「ちやんヤゆるりと春かあ〻〻ちと川と多賀町まで行

て来るゝ　文「ヲヤ〳〵そなたこそ」マア「ナニ私ガコトノ
ウヽサ　義「コリヤいろ〳〵と私ハ義理づくで
て　多くの物を捨てる義理ハそなたゝても我儘よ已へ
の義理ハ仏の処でもるを世理と私ハてもこの方の言葉ハ門か
ちがうを選ハ天は方ガコトノいと義理ハ幸ひて呼つ
てもそのうゝくしい志ハ面よ生涯ガ甚方の不運を
うゝ笑ゝモウいろ〳〵理義ハ言かてでマア聞くちやんよ四
コトとたのゝくヲヤやんぎゝ男のおきたがり無理ごと
宝ガ身も志ハ「マア堪忍ゝくハ門ものの通り機嫌を
直ゝくお頼り文「旦那マアのふちハ義「イヱマア帰りて
まゝ事やせうゝんごろもゝ公明宜ゝ門ゝく辰巳婦ゝの
義ハ為ハ「ウヽ仕ようの殺ゝ者ゝ同ゝ二枚目
ガ死金ハ生ゝ山ゝ人とのゝ生るも星でも
コトの年ごろうと言ガ付ゝくゝりやゝ仕ゝくゝいドリヤ
ゝく高ゝうト出ゝく待男の仏果八ガ家ゝて又ゝ
くゝる親ゝ孝ゝもおゝび自きその信切八教ゝ仏山ゝと

深くつゝしむ中とおもひなさく せうく懐の邪ど奉公人と言
あつても物好なものは本玉さんのいふれにおよばね 悟から
身持よ吉川で大悪の金八といふものアノ蔵さんきく〳〵
うんざアモウ〳〵死んでしまひな 文「コウ業八さんおくアア
さしく邪くねえぐらゐ中つらく〳〵と耳へきいて意
よ吉川でぶマアよく了簡して見なヨ今の浮世の蔵さん
のやうな実意の人をわるくいふはわるい人じゃア雑へ多
あてく他人の田へ水を引やうか異見をいふ事ハないく

雑へやうな事をいふ身の上なら又蔵さんの気の澄やうな
法のつけやうがありそうなものじゃア雑ねへ「誠にありがてへ
真実の事しい甚さんの異見私もいろ〳〵思案をし
ても 文「サア蔵さんがあやまればあやまる程何でもおもこれ
まで大層く世話をかけた人なんでもおのれが悪いのだからちや
愛敬をつけてあんなにやさしく悪性気でもさせねへのがマア〳〵
おれにまかせな其人をうらむ思案があらうかなとよく折て
粂八が逆「ほんとうにありがてへね 文「蔵さんマア今日から

[illegible]
ん[illegible]、「そんな[illegible]どふぞ、おとろさん」「ム、義理ぢゃ業ぢ
[illegible]ト斬る[illegible]の[illegible]の舟の解[illegible]
のさ[illegible]如[illegible]
親父殺実[illegible]
知[illegible]風[illegible]

春色梅児誓美巻の四終

春色梅児誓美巻の五

江戸　狂訓亭主人作

第九齣

[illegible]
[illegible]
病[illegible]
恋慕の情の[illegible]
有[illegible]

ぐらゐ少するその風情まこと丹波帯も米八が足袋より月日
を送るあいだにいたまれ中ぞとへほ昔ねどゆゆ又
捨ら是れ時宜ありと必ずぐぐうぞ甚身より丹波帯
と活業さて思業よりまさる門只見るれば若若三三人
三人アイどあんるまえ人姉さえい曲ちく八イ今見へ手老
方へ出りまして在ます世えが行ぞどうでどぞいまたう
三へさまへ外でもるへごこての姉ぬい女まだしろく人の
世話代あるさるが知ちと此帯おこぐも老の丹波帯を

かくまつくあるも去年尋ねてこいと代官所くく
厳しいin詮索なるく此宅ホおれへでホ行処ろ近所ホ
かくしてあた姉ぬがえ捜ホおを遣るいと出ておいつくが捕も
の役目ちしおいくまがいひ行らまてうとての仕合ニ人
縄目よおまえでも又言ひけの仕業ともまつ出娘姉さえ
ハ曲ちでもおへが丹さえの在宅を知き居るぐちう
三へイもくどして姉さえも私もの拵のお方ハ天十二知れへ
るがあるあつまいもおへいその丹さえといひるづけて別

まくふあるこのゞ又出帝途中で出合ていろ〳〵世
話をあるまで初まてくみるぜ〳〵イエどういこて〳〵イエどう
して初〳〵れと強掟いやア是都がれくものうらいらしいあ
へでも出ずにておいてもいくそなるョ〳〵そまでも私ハ〳〵詠
かくあやア斯すると三人一度ホ主ゆりお出をヲ手くこ表
あらばげ〳〵ヤイこの女アあるくしいそのうちくしいちさ
面でまるくと虚をわるすうサもやく丹次がゆく表
いとれと駄ごぞと雪より白きこをるく捻返さ

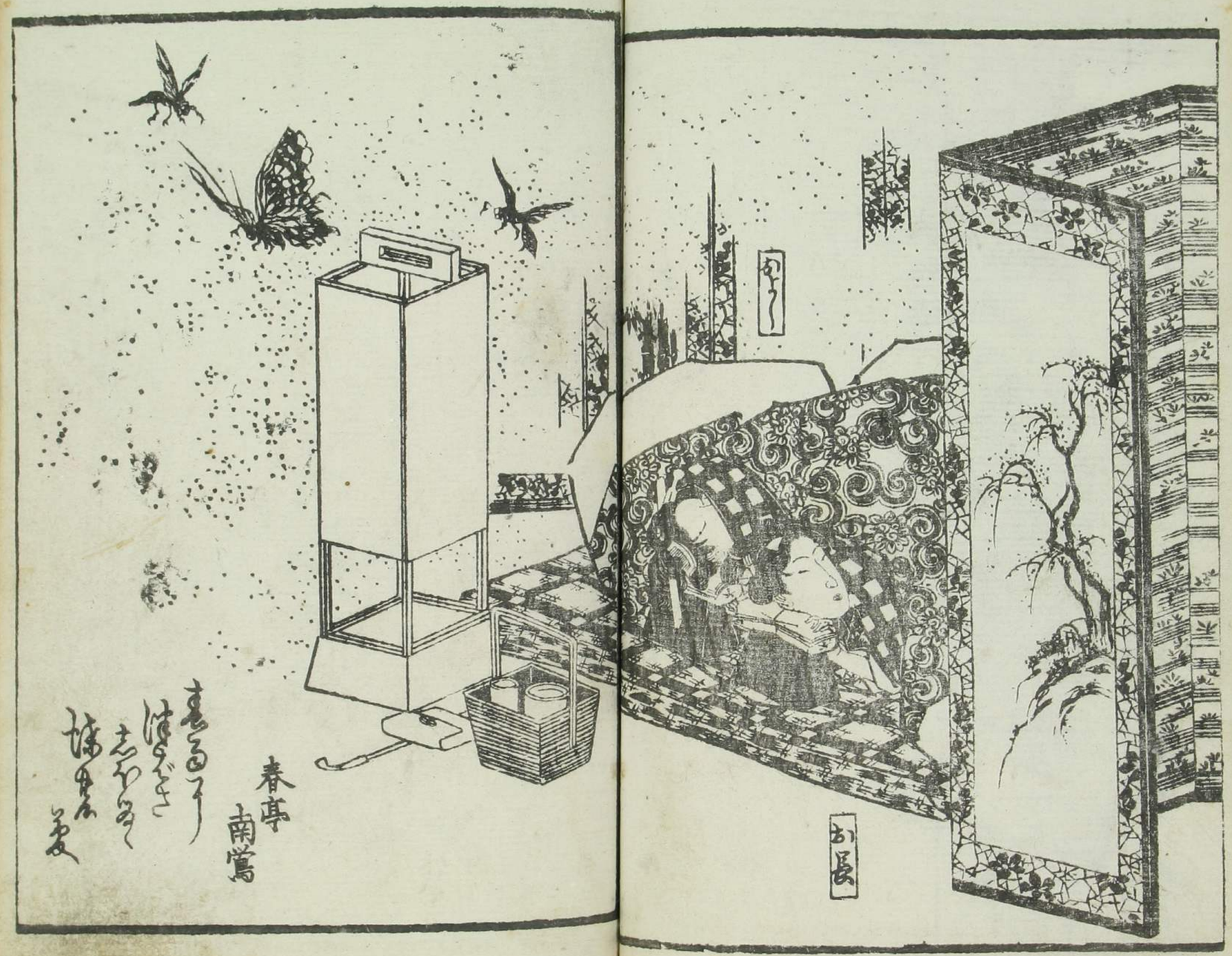
まくく口惜涙〳〵アアレどうぞ堪忍してくださいま
〳〵そんあゝ丹次郎が在家をいかゝ〳〵イエ伺と
おのひるさろても丹さえとゆゝの在家へぞんじません
ていこどうぞおあとるさろくでございま〳〵〳〵〳〵
面さしても男の在家をいかれくりまべかりといそうばが
もあくも同罪お役人さまがお出があれば出ずこてとらう
とおくゝ情ぞでおいゝ来ぶやさくく変べ情強くあう
わとこいやるあくこぶれ〳〵ゝお代官さまへ行ぶろく行て

おのの是責くく自状さすとかいくあくまで今ごく丹
次郎が落度といふハ島山さるの金の一件千五百両と
いふ大金なのがことで中々も覚さりやナ日延もできな
めく物でもなくそまづ先われ〳〵見ふまりやナ丹次郎ハ
街の頭人さま丹次郎が身を大切ふそうく金の工面を
さるふとしの人ハめつ示ふもあへイやとんるるハいくざる
お世話ごせくさるぐアさるぐわれくお代官所で言ふ見ーや
是と無斬やお花ぜいまめて引きとする表の方丹次

郎ふ縄をうけ村の役人附そんば所の見物ー三人お由が
宅の家ようをそんそ見まく頭人が此通りさるく校業
の者ハ迎ての山海法その女ハ宅へまづけて先く来ま
とのくおそのハ洞の同をちらひんれば長まそ丹次郎
ハ目をきくく見ふきのまくめの縄もうくめー憂るの助
重ありて来るのくこと胸くるーくも取ときさ自さーいて懐
の洞ふさある道のせやおたハちりいそすぐりるげ
くを押隔月一こまくく姉くどとりんごまが人の側へぼっ

くと寄ってゞ已まむ因羅と暗く寂しく倒るゝ御そば
間よ村の人ぐの丹後弟と引きつゝ御やうゝ起あゞり
ちへアレ待てもてなるさのヨリ丹後弟さえ丹さえんりと変法
あゞる一生懸命姉のお由が変ってコレヤ〳〵御さえヨ
お長ゞうやと夢をこうの目を覚ーこのそうひ
ゞくうるさるるら御さえ起さえ目覚てこれゞ
一ッ夜名姉と添寝の真夜中ってえい冷汗の乳体と
うさちへまゝ姉さえ場名ってゞさいます大きる変でも

ちへまゝうへ由アたきる変で丹後弟さえ丹さえんり
と二度だりいのでも私も目ゞさめるヨちへトゞうゞ
まおりへい虚だうとゞゆいゞ胸さえぎ動乳へあゞ
おさまゞず由土おりしいもあのいまゝゞる縁で見
寸と寄ってゞ影ってゞ寝もこちの城の姉ゞと呼べ朝
夕まを長せゞず長打を言ってうヨゞ伝も姉さえ溝てれそ
うゝそを下寸へ隔ーゞそぞちあけてへ少さのゞ
ちへまゝ仏のとへ由仏のとへ寝ゞゞ今姉さえゞ寝言よ言と


春亭
南嶺
お長

丹さえと云ハ中のろふ者時日影の男のうへで幾よくすゝ
侘居そなも女の仕送りでたろうい客子その中でなと此
須へまとまろと金ぐるるるまべ畠山の室の一件でおづろ
しいとけふあるとのるぐそうぐいるぬお世話のあうるれ
ど人の親兄を身にかくく助さのぐ私の心願といいと
りの金ぐくいろふ任せわ浮世の常ろてわるうろう
知つく居る他のるといろるまいその丹さえのさかる
苦労とさとくが操とかくく心の誠の形い所あまくも
思ふのつけぐたおるあいろわくトいろくるるるこ「ロビン」
おろるそのおなる丹さえの男の親兄とハそなあく今
のぐ正夏でト是ろの今ろのの由「ろしてアまべちろも
早く金ぐおくらくる場合ぐ所ろて、おまりて人のぐくう
ハ姉さえ私ぐ男をぐろそして由「ろまでやっ私ぐ魔ちと
かくまさくの宅の後見ふ立流ふ法づと日上ぐ入てわく
ろけるあるりれどおまくの心ろと言て肌身を汚
さとるる勤をさてハ女達と他ふいまさ私ぐ外交

翌夜が明てまこと能智恵も出るぐらうまつし
雖
松も丹さえの花へ咲よ咲そ更へ行らの客子ハ却て人が亜
小ぐるまて来ぐよらうとといまてくお主の姉〜きも
赤坂まどいろ男の羽のうへ忍ひる早てくよくと篠〜まて
耳よ暁の撞もうぞへく待あるすと意乳地よ迫り
てハ粋な小梅の名不も似ぬ胸の煙ハ花焼竈よ焦る
朝霧よおきてく勝くへくちる折〜客ある朝勤めハ
本中寺の壽量品おもひまと忍ひこむ丹ぜ幕ぐ無
支そくさハ壽あぐまま求るぐ〜二人一所と量ある品
こそかハまま世の中の人さるくの物あれど察〜心のある
人ハ喜まてこ志れど欲よのこ〜ふける匹婦の情あ〜ふハ
実の恋の要ハ志ままど嗟人情を推たるまべ人間万
事中庸のるぐよくまるハかくもあるる
○つまんの梅ハ咲きてるまま門さき　延津宮
○うらうふまをかぐくん雲の毒　小松

第十鵜

丹「まや　おもうどうして来さうに早く来さうおいう
へ今おきてこれりごの処へ行といつくそてあふ早く出
て来るのごと　丹「ちうがそぞくすりう　「戒ふもうぐ〳〵どてあふ
いとないで来まし〳〵ちくく切るへ　丹「あぜそてこふいそいで
来こと「あぜといつて私いもうおまくさえの臭いをつくへ内
へどくも苦労で疲〳〵くてあり居るえごヨ　丹「なのその
かうふこれふあるのごうも「あふがといつく私いもうあへ戒
ふもういやることいと爰ばつくちうこれふあつてそうへ

姉さえんが何処でうおまくへの身のうをやてお親ごうう
今朝夜の明るのが待ぶうで有ほてこヨ　丹「すこまのふへ
やーいるといつヨ爰ばつくへでそてあふ疲る散よ
さうとぐ起がおるのめうも「イ主爰だうりどやあいヨおまくへ
さえるえごう苦労るるのが有どやあります　丹「そうさと
そうのごりまどなのも其のうふ業どるるのあいヨ「それでも
私へやのまうこと起を　丹「ア何ふーてもを抜へかう　「日や
そんふ寒くくて泳ふのと思つくちくを決があいのごと私がを

まつ〳〵らくまをすヨト　さまあぐりこうろ
ゆて　おくすヤハ　箱ニ入れさえく
ゆう　ぐのゆまを　穀くちいぢりまわ〳〵て　ゆくひご〳〵　兄さえおう
ゆ　ほうちぐこと　私ゆやうぐうもつきそうもあいヨ　丹へぐまつ〳〵
ゆ　ぐ打分ちう　天ニ　穀ハ分るのへおめくも　米八も下ぐ　米八
さえハ兄さえの宅の勝ものあれて　おぐごらうゲ　私ゆやう　知
ぐ　ものとう　麻ごうゝト　すとこまる　ぐハとゆうぐ　丹へまと
まとれるヨ　ゆ米八ゲ　おめくふ　ゆ　ものゆ　物うゆ　ゆでも　勇でも　おめく
の方ゲ　おゆ〳〵　穀とゆて　居らうるト　ようぐ　ぐうけるおまゆ
ゆ　ぐとびんを　兄さえ　ゆ　ふお金のいうるゲ　有ゆやう　有
うけ
ヨ　甘えう　丹へそうさちゆとこまうて　居るゆ　ぐ　ゆ　ぐうう
あうぐらうヨ　ゆ　ゆ　そ　ぐでも　ゆ　ぐう　ゆ　ぐう　穀
ゆ　ぐ　ゆて　居ヨ　ヨ　ゆ　今　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
丹へ　ゆ　ゆ　ゆで　五十　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

私の身をどのでもさるこれで来えでありまするそうごけ
まどをまへ不自由よあんなまるのいとるるいうどのぞて聞き
て居ても時節自のあんられる所へ行くこのヨ丹へもぞ ぞまへ
いくき往これどもへどこぞへ私があづけらまくお金代とーらへく
あげるヨ丹へまくそうやるんごるぞうるいそうふぞ居て来へ
ふそんるるのぞうさせまるのうちへそまでもぞうでりてお
る金代まへーらへるいとまへぐどのうきれ私へ死ん
でも社よいト いんぞこどもどうのあるや もへ見さんト いのつぞふ
まうるぞーてもるへくあり まうるそまる

まだ[illegible]と[illegible]こまさ[illegible]流るさえるョサ[illegible]く臭をかきつのと抱
[illegible]ます
[illegible]せきべ結ーそよふようう流い[illegible]おにさえ[illegible]も[illegible]あのま
あのうどめで早く[illegible]ーて居て伝うの用をしてあげうう
夜も泊ーくあいかうトーてあーをいうすかうはて[illegible]れ
うくどふさろのご[illegible]一所よ居ろとゃするサ[illegible]そーて
どふさろのご[illegible]おしいわくそれでよいおうア[illegible]おいく
ハ一所よ居ろだろうどゃ否[illegible]あぜ米八さえであくそい
[illegible]のュ[illegible]ハニあのうふかまくあるも[illegible]ョやうそだうう大

そうお中がトよいうせふ行くとしいト白眼ろ
[illegible]情[illegible]
わくぶ仮是世話をーてそ[illegible]ろうう臭ものさ[illegible]ガ
[illegible]りいお臭ぶごろいうもうふぎろの二階でおすくえ
ぶ米八さえの臭ともふさるお臭と言ってそのういう
しの目不安敬ちーいしてゃ食ついて上ってのようふはうくま
ちことのウ[illegible]ーたまーれくるをいうおくとそ一月ほ不美く
娘ごろアとふあろうう今ふおいくがやうる貪乏人い突出す

ごろふト いふときさんだいの濃がめる 米「ヱヽ兄さんいやだよ。髪が
よごれてならねへいけすかねへヨ 丹「まアさう隠居するな
あんまりおれが結立てやらう 米「サア結てお呉なせへ 丹「サア結てやらう 米「サア
ト こらへかみをまくりあげながら 丹「コレおめへもよく考へて見な
坊主にさせる疱瘡をまつ一番さきにさせるならでもチット良
やらまゆをそこねへけりや人が惣髪でいるさへあるに
アノ由次郎があるじやねへか 米「ヨウ兄さんそんなことをいつて
ごろうじてお茶のごヨ 丹「ヱヽそれきりかなしかるか

米「イヽヱモウ其はなしはもうよしにしておくれ 丹「どうして
おめへはいつでもそれだ 米「ヨトいつてもなにもかもおまへゆゑだよ
見えるからさ 丹「ヨト上手うに逃るといふものヨ
て横抱膝のうへに乗せ 丹「サアお米や乳飲で寝ねへな
ヨトいひながら自分も良き米「アレくすぐつてへヨといふ
八色の本調子さらりといふ所へ出て来る音じめの
折こそあれ破れ戸をガラリと押あけて入来る二人の被
落戸ばくち打らしく丹次郎お米ハおどろくの躰

えーその風俗の人ぐるまはなりてこれをしてくる
へくるとかーこする時ホニ人の丹次郎が右と左へ
と座ー　●コラあく　●おぢぢ　▲ヒヤ　●おぢぢ　▲老の丹次郎　●ちやうたた
るへかまとこいつちやアそこがかくれ　●そよよ　盗人と
いへおぢぢ色形くいびる　貸借　▲てのコラくいやアこ
かうり　丹　アイヤモシ　お二人ちのホおもしろ　お言葉かのふ其
ちうの　●なるほど　●へ押ぐ法多　●畠山さるの宝のもつらぐう
越で　梶原ふく　賣つけく　金の残らずもめくぐ巻あげ世
間ハ分散ぢろぐとのひて　▲婦多川の妓者を囲ひて
味イたのと宅ゆうとこるかとのしい不塩の娘とこのきと
ぢろ越で　●朝ちやーーーーーー千話ぐるひあるまり　押ぐおも
ちらちう　▲てく色男ゆへ伝ぐ　●かうりふやう　丹ちうぐ
ある　丹　イヤモシとまへけーーうふ　▲とうぐじぐ　張屋すう
とおイ　せうふもおしくねく　●へ縄かるへぐ　▲笑
いろイのめをおへの名代金ぐあけりやうとこいふ　●まう
ぐふの代のぐ　▲そんふちとまうふそうくもある

朝霜
海ぐ解や
縄手

めへ。●サア代官所へ引きずりうント　丹　ずるずるとおしやれ
ヱヘアノお金がいるとあると　丹　えらいりくつ
ますエ。●サ　お娘が仲人うそ　丹　あるに二人グルに退して此場
いさとなすまめとり小判でざると五十両　丹　ちりとりふお
娘が一二年おいらんあるやう　丹　ちらさん
いへ義理ある妹ぶしてその　丹　ぶんの
代官所へ　丹　ヱヘめんどうぶ　丹　ぶんの
ぶへぶへお待なさて　丹　ぶんのかとりふ

まつが通をぶうとおしてお金をいく内さいと
ふして。●ヤレくいふぶ信切のめぐそイあるおめくの
ふめんどと　丹　ぶんのかとりふ
あるさまたちの悪漢を処動くとみとの天ぶ
ぶへヤイ盗人ども　丹　ぶんやこの娘をうとする
●ヱイ　ヱヘサア畠山の宝の一件　丹　ぶんの誉田の涙
即この近常が人ゆへ頼まの。●ヱイそれあるあること
畠山の　丹　ぶへ家中とちがへ　丹　ぶへ

モイヤわろふ詮索の丹次郎お年の対形で人の
詮さくその方ぶのいづまの家来次貫温袍木
三尺帯又五尺丸腰五分月代ハテ珍らしいの風
ぶり早く同通りを通ずへあるしちろねトてろぶの廏
ろぎこころとぶ三人ハ・ハ・めぐこころやアイと
丹次郎手方まろこて存ぜずとも久代ぶすへころ印
形へ謀判あるともそもちぶ対のうへのづまに落度去
あぶ〜右の金子を半こふ割付上納いたすあるべ
格別の意恵をもりて溜一ムまえと同役の相ぶえ
ろて内金二十両明後日手で金役者まで持さえ
いろは迷惑あるイブ金ぞろの百分一ホもこぶざる
上納あるぶとぶイドモ世イさぶべと計りとぶ教
いまれいよに祈願。大家の藩中役柄の人ぶし
又人とあるべ

春色梅児誓美五了

春色梅児譽美　巻の六

江戸　在訓亭主人作

第十一齣

鳥一羽濡て生るり朝桜露霜舎〻山茶の客とやつて朝まだ元霧屋ゞ家ふみすゝひ〻表二階の逗酒ゝり

ちゝしる皿小鉢下へ持ゆく〻その酒ふかの婦多川の米八ゞ紀ふ岩の恋衣恩ふ若ゝるにあらねぞ胸よなさ

四ゝく山茶ゞ一モン正米八さうえ初てのゝ多り私ゞ自まんで

愚智やいさこの願ひけを聞きつるうこそ禁物とかねよ誓
ておりイーしこそあれまうどやありイまめくうそやっ成
わど義さえい男公のいこぞふかもう言ふあくこらうぐ
強ぞういこのよけよろ私ぐ参人ふ達引でこまでふ
ちこ信切と勤いよちぎふありイーてあまりどやみ
せんう「おいこえエそりやモウ仏と恨とおうちあうまー
てもゆーもこ言ひとへぞれません今さこ私ぐぞのかうに
ゆてもえ拝へこ言欲らしいと思ーいとでもありまかう

けまどさこくそうしこ欲どやありませんョ「ナニサそうや
モウ初めうして表れた良を嗜まる合点で世界をて
表
上エーこのぐ私のあまりでぎまたこ「そよ」言ふまへ
ゆーてへ城ふ私ぐ酒ません実よ多義さえのお借と
て愛まで手つく義さえおいこえの呼へお出ぐとへ言
ぞとちまこるでありまうこ門呼へ遠高の私ぐ身
おいこえエい下へ形で言侍まて堀の舟宿で延津賀へ
さえよ愛まて濱の宿へ浪て今朝義さえのお迎ひ

ごてうおいくえんゆもお同よかくらうとやつくさこ義さ
ら義さえいやのべ余所へお出で今モウ帰りておきまひご
といふまて私ゆどクラーてぎうせうとやつておりま
ちえでどざいますものを「そりやア義さえと申したこと
日もまう分ったとでも言ふ口トもまた申した「その恨み中くふ
ありまとい出ひますせんりまとしたこと私ゲ対のくあーさを
ぎのあうごと思ーめす始めの実ーよ義さえのお鬘で対侯を
ふ他所行ま遠島のあいと丹さえとうて座へおいくえ物まく

えのいくふいまとまは信切その姉さふ引かいて
住ことろこと義さえゲ女ふことを怪こあうふ日々の存義
と茶や舟宿宅へかいまども客へ義さえもおいくふ方
ごろ〻義理と思ふの二道を情で塞ぐ恋の責動きの
ままはさ一向ひま苦の出合をいろくと別いくふも義さえ
へへ五まろしくふへまてもおいくえへの芸式さく泣つ
ふ設ろ言はけまべきこ再宿の亭こまさえや相元の変装
元人傳よまてかへ品をこ義ごうて後とこて

ばでハ人目をさゝめくと思ひの翌日翌夜多作ふ
信切よいそれて着てもイちゝハと返すの出来る伏
でハるゝいつも形が突かつと乱桐づゝーの土産とんざ
色気も恋もさめたてる寝のまゝにて二度二度
孫子といへば「人目」と恋と部やくまで仏づくひの土産物
自分人出居れの形ばかり抱への子供のまゝもあるすば
あくすると已物が増長すると蔭言式いわる胸の
ムゝーさも初といへば丹さんの貪苦をみゝぐまいゝんの

情と他でかゝとまいぞうぞすぐまゝんへ恩が七の
出来るあうと倫伽山への月参り妙見さま千扁の
おぞいゝいゝそのほで浮と調子の経唄を導とも
おいゝん坊さんのおいハ日小戒ハびいるすす
ハありませんョぞで今までの中ふ記ふ記ふして
おんなさんョト「ぬんまんゝ」
あやまりイゝゝ法さうとうハ中ゝくも崇さうぞり
養さんのほハ遠ゝ便アハあゝうゝびイまゝぞそん

あゝいふお人ハ心が移ると見え「アリヤ藤さんの癖でござんすと
諸方の心が在るといふ人がありますが風と心がうつるといふ
と其処へ一図にわるい気にあるのが藤さんの持まへ夫
でも女房ハ私もアト言て跡をいひますまいに此
おいらん発明な人ゆへ藤さんの世話やかねへまでもどく
言のまゝにハせずにある よね「モシエトおいらの耳ちやア この「ヲヤそうかへ
ざますかそれまでやア半さんのおりすがへ よね「アイサ どうして
笑イなさる この「それがありますものをよぎんすトいひ人をまへ

かうして女ハかうこりるのかへ よね「誠に小寂な所へ気が付て
来るもゝをいゝけるのと言ちやア有ませんよ有ますで
この「有までもちゝ川と女が母さんで惚ますする よね「イエ全盛で
ありますヨトいふ折から此方が新造いと花ハ気がせまると
二階へ来り何か紙に書し物をいだして 花「今お針さんがお
いらんにあげてくださいよといひ 志まさん下みなさいといふと
おいらんいろいろと抜えあがつて この「サヤそうかいものゝと言
遣イスね 花「妙見さんのござんすし サ よね「ドレ おきせなさいな

ヨトゑふをりゝゃ二十四番でありますす

番		
二十四番	西有白虎靈	ゆの方ふある人がまゝゆあずまも弟のこゑふかりきこ
	是邪悪神形	そまとふつのそかんゑんをする
	家中不安穏	るあゝんおまひあきゝめく
	万事何以密	ゑもしはきもべし

ふあゝゃおゝゝ湾岸ハ何方ふ當りイすよ　よゝてゝど西
ふあゝりますすごらゝ花ゝそまでやすまさえがおゝゝんの

こゑふ　ゑゝアハ　おづゝふゆゑ　よゝおゝゝんゝゝなぐど此節苦
労よあきこのまするゑが有ますすのこゝ　ゝ十二　今始まつこ
苦労どやアありイせんが私やアこゝるおこゝどゝハ姫ひ
ざまに今ハたこゝるくゝてもまゆハ嬉しいゑゝ若ひが
どゝくとゝゑゝ楽ふもゝりイすゑまど伺ごゝ上どやア
ゑゝりイせん弱人でハあくゝそもゑの〻こゑふゝゑと
いゝくあきゝめられるくゝゑあゝ乳を操のゝゑイ
せん花ゝそゝごまにゝ秋こゝどゝ秋はゝゑまゝとゝイ

きてふ「おいらん」は吉よりつとやまするゑといひ
まれよりかけさいまするゑトいひどおいらん此糸ハ胸
ふあつりて岩ひいる者の山路やいだ〻の行る浮川
作のあぐまの身そも傾城の種といふ〻別よ蒔る
畑もあ〻こゝる親ゝ兄弟の〻ゝ小苦界の年のうち
色と商ひ色とつ〻こゝ用ひ〻ても月と日の永い勤
めふ短夜の種もかぞへて暁を待夜もあまべるゞ
き夜の鄙の音恨むに床のうち九分の〻ゝ二分の

樂ここそ生さえ男の乳ふ入りて尽せー情とあゞ
生る母〻も多くあるゝ多まべ食事といふも物ゝ
ある嗟傾城ふ実ゝ〻ーとハ板橋雑記の情ようと
らず女郎の終身ハとりきまゝ〻ーて〻〻こ三十九
の上ハこすとも〻であるどけ〻く花ゆふ月のあ
のゞ花ゆて折この風情あるゞ真の契情のこゝよ
〻て素人の操と守ると日を同きく〻ていゞべ〻〻ず
必竟このすへ此糸ゞ憂身の果ハいつあ〻んそハ糸

三編のそなめ小解べ―

貴官藤吾衛門氏ふようていまぐ批評

をするとうるまに作者自身中ら奇境をまうけ

てすきうりはとてぬるをくべ「米八「お蝶「此

糸が実情を三幅対とし―いきてう新奇のふ

所あり発市の日とまを世めてとれるのを

第十二齣

八重といふ工女間ふ逆―梅の花をうる時へあり

あづ〳〵まぐ春風のさそはずやおもひとひのまれどころ

知らぬくるし―き今日の月ハ四の丹次郎がこゝあふ

ぶ奉公ふ出世を召るる浄瑠璃語とあり[illegible]

竹蝶吉と呼ぶ[illegible]月待月待よ招ぐる娘の浄

るり夏きるのそも寛芝方が丹誠ふ仕あげ―

藝の間ゐぐとく処と嶋田の髪をきるて男に

対情が今幸ふ[illegible]髪化粧をし―美さ

二階の窓よ―で[illegible]今宵よ[illegible]お客の好

出ものの後ふく一ぱい

すまく婦ひとりの物見でも配後ぶ幾あるぶ屋ア
そのも意ぶかさをだいのはきこ時ごんくの咲ーや
るせも金板ひんもへと浮ちこと花のもと多ーさぎ
ふぶとちふぶちらひとも色代金いねもんできこの
ぶ色ひのとるとまんぶよとやたが紀宮れもち
一ぱ。そまふもとよ出ねんちふもやふとあいぶ

見せびらしてねまーこたつさ一人の婦めれのが絵ろ
くみしても意色代いあけきぶ下雑代間いぶもうにる
らぶぬもんでるりとこを物けあとでいあに身をぶ
てさのどいおぶせよ想中せ井夕ひまきあかノ
配る和をこそきこひのとまぶり身ギ意ぶこり
ふるあれふ小梅い身も世もあるきべこと。そ
色いぶ色ぶ浮ぶ知ぶ二紀ふ別て
よりこそもひもあ見ぶ。

此家の主人老女お阿といふる妻婦なり元八
お芝が実の親唐琴屋の二階よりとめ客を
たぶらしが強欲非道の曲のゆてつづくの金
より利をかさる今八幡くり雪の下寮陽ち
ふらいふ借宅して音曲の子供をかく渡世
とせしが此せんも老のくびをまくるよ恨を
ふりくさのお蝶と二十五両ゆてかく諸家へ立
いせて祝儀をりいせ活業とへいふすなり

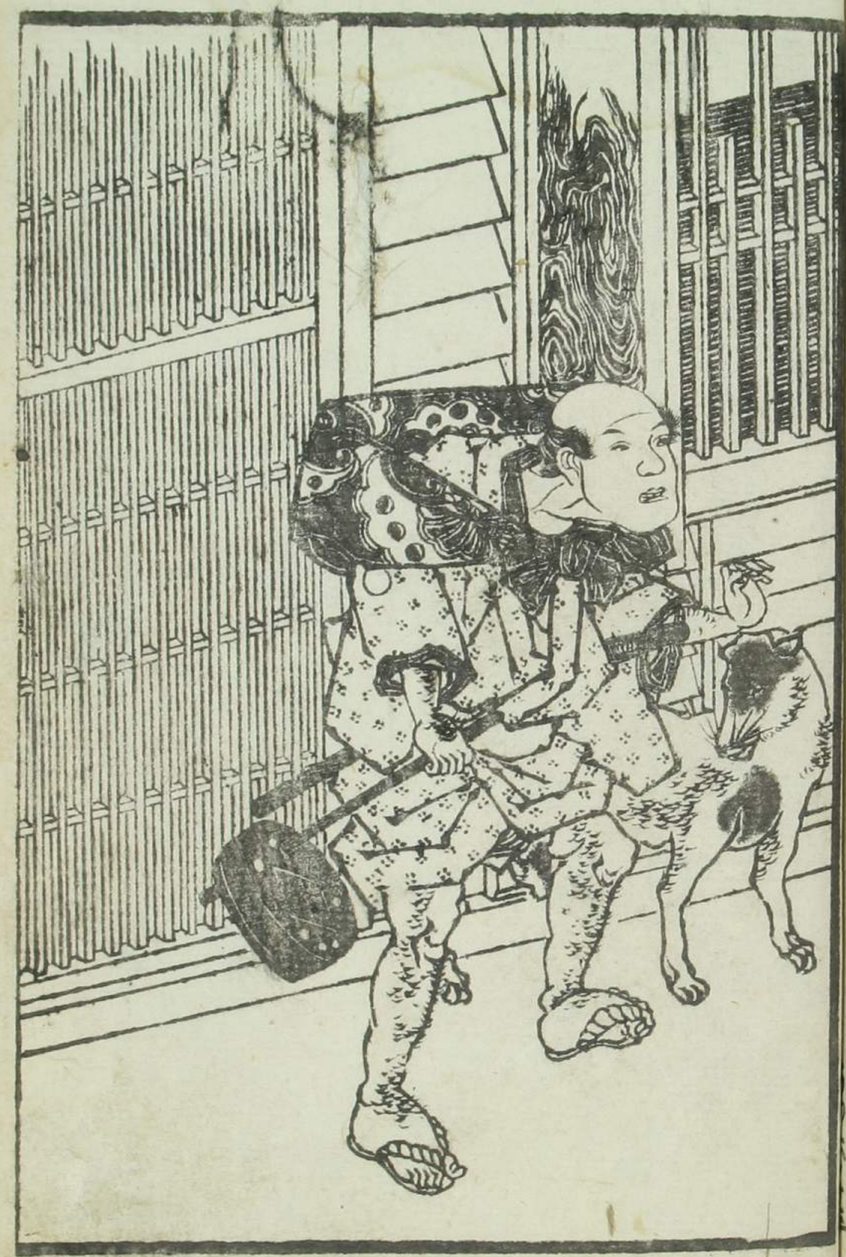
ふりこの金八丹次方へお芝八以前つひふる事なを
母とかーづきくその間花八主人と地をまを朝夕
はぎさあく呵らくに惜きさを諸の金とハいひ
ふぐ抱へらくかりふふ不をまぞと知づざりし
あへふが家のやりをとふくずしてそのめーつひ
同ぜんふありすー運の拙ふをを日夜よ歎く
もものび涙あのまをふふをを世の中ふりお阿老
女いいふぐーく階子の段をふきふぐ紀

く蝶高くとんでゆくめこうお蝶
も「おやとびゝ」ゑ「いゝかげんふ空耳をたゝゝゑエ
ゝんぞうめエ」も「ヲヤさゝぞう初まゝ」あゝぞ
モウ九ツゞ時とアナいゝうげんにしく支度をわゝ
ゝる麻くゝゝ」も「そまでも今日の出めゝ私
ゞ語ゝつけわゝめゞゝゝよく後つて行まと
ゝまるめのヲ」ゑ「ヲいゝそれゝゝすゝにがゝらわゝ
でゝるとまゝゝくゝといゝのふゝちゞゝして

居やアゞつゝくお面ーきゝ出るとゝ座ーゝゞある
ゝゝいゝと足元ゝゝ鳥の立ゝ出ゝふさゝぎやアア
ゞゝアなでもおまゝとゝ麻よしてゝるゝゝゞアア
仮ふも駄ゞゞあゝまりに返答をゝゝゝゝゞ
俳ゞゞゝゝゝゝふなもかもいゝれわゝ
さゝぞゝをまゝゝいゝゞゞでゝめゝの藝ゞゝ
いで二十の三十のといゝ金の利合もゝゝるめゝ
そゝまゝゝゝゝ尤文太さゝゞトいひけてゝゝゞを

あごをおもゞ例ふすると多くぜるを吉ち
左文太さるはたそうに四門福ざといへるは
万長でも笑ことやれへうそういへ金のちが世
話をしてやらうといもるのを今のうて逆
るもせず。まるんざ泪ぐんで居るのうれが
ゆるしいがゆへいのご不吉るも今まで
渡つく居ると長吉殺しの所ばあはまざうツイ
泪ぐが出えんであります多へフウリるめで語て

子めへでかるしいのうぶへぞ笑人ぐその半ぶん
情のうれへもうあへいぐ廣場へ出して押あへ
しへうだぐうしとるる連も出来めへ少し
小そくかうえ笑人へやびで濡ぐうう
まざしも目裏ぐちがまんそうでえの白い
ゲお仕あへせそれへ彼是人さるがこまへ
訳てもんざさるのざ蘆で立流る形へ出来
れへとサかういへのもおめへの為ざ行の今どき



竹蝶吉吉五郎

石さる深

十人ばかりで且那の二人やこ人ぐらいとられ
ることけがあるものもへどのおんお客を大切ふ
勧めて浄瑠璃を精出しませうがどうぞ且那
をとるの先文太さまのお世話よりなるのといふ
るの堪忍しておくんなさいヨ。へいんあやそう
いやう此方も言ひざるめへ勝手を言ひちやま
ぢわへコレ浄るりを語るといふうがあるで三十両
うの金を出すものがあるかとやうまさうの時

の用ひふ受ることある二枚の絵文且那がいや
あるゝ恋が窟の郭へかよひて年一たい生日故
人のうどこの中で苦界をするも亦ようらう
且那へいやざるもさくしい（アレサ母さんもう
よいつれ出がけふ者へが小言をおいひざし
ましにかうゝ者ざるきの機嫌もとりゆくいヨ。へ
にだうしやるなりゆくゝの往ざしいヨ。ヨウ小こ
言をいへと激しく自で居うが大かと甚方の腰

の中ぢやア元主人でいふ気ぶらうがそりやア
あるゑど六七年いぜんふたりの一年わどとんで
ころあく新宅なく唐琴やの女郎衆の世話
して居と時由みゑこぶ伺も奉公人ときまつて
勤めて居やアーれヨくく伺すぎて昔ごとに
ものゝ出すぎ私がそんなるをもつて居やア
ませんヨトいろ少いいくもどもよハこゝしいくも
あまりなるお河が雑言始ゑれよ迫るゑこぶの

たゝくく折くく表の格子戸あけ武家の使と
こんくゝる男ハイチトおたのみます梶原の中さま
くゝ参りましと蝶吉さんの迎ひでぢざりました
ハイくくこゝハモウ大きふ出ます蝶吉
さんくく支度をしれくくろマアお茶でもあげませう
今日ハお客さんハ大ぜいさんでぢざりますか
使ハイお客より芸者衆の方が沢山でぢざり
ます桜川善好桜川新好湯又話家でゝ

龍調ふ折橋清元でハ志ほ太夫ふ壽女太
夫延津賀踊アとでハ西川扇義義太夫ち
此方のお蝶さえふ小でんなのでもアハ大さうなぎ
さ子多へまゝくそうやアアアおりろうらうれ役へイヤく
ものごあるへへおりゝが且那のぢいきの婦女川
の米八梅次トいへおりゝうお蝶へちゝくして二階
ようおりきゝりこと三を笑ゝくへまゝ米八さえとあう
もお出ごとろへ多アアそんあるをきくより

ようきものでもれへゆうふーろさあうあゝモシ
ごうどお那ひゆーます役モシく余所のゝ子共と
遠ゝくきゝが行れへでとまり切ます役ヱサお母さう
詰みさえる娘子共のできゝるのおだこる方ゞ
ゆとゝゝくくてよゝどぎります役ヱ乗りやせう子共イ
いりて乗ります役ヱイさあうあゝイヤごうで今日八盆
夜ふゝりますョ多ヘイそれの有ごゝよお蝶乳をつけれへ
ヱヱイと出ごゝ五風俗の梅我ゝよまゝゝる愛敬良へ上ゝ

お湯七子上羽の蝶の菅笠後下ゆハ嵐地紙よ大
きく流ー丁子菱縮緬の衿ハ白綾ゆ朱紅で書画
の印ばく袖ハ緋麻子帯ハすこ黒びろうどゆ紅のふすま
のくゝり仕立ちうも同ゆくろ三升格子の腰帯ハ
おあんど自茶の金ちうゆ勿論巾ハ一寸三分五分での遠州流
行ゆ形ちどもあるゆ若れ髷げゆ美ーゆ姿ゆまーどゆお蝶ゞ
ゆ以ハつゞまゆ者ゆ楽すゆ見ゆも浮世ちうゆ定
春色梅児誉美六ゆ